

# 令和 7年度 園評価書

園番号

24

園名 静岡市立東豊田こども園

## I 経営の重点に関わること

評価段階 (A : よくできている B : 概ねできている、C : あまりできていない、D : できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員会から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
「心豊かに表現する子」	「おもしろい」を見つけ、遊びを創り出す ～自分で考え、やってみようとする子～	子どもがやっていることをじっくり見たり、一緒に楽しんだりすることで、子どもが感じている「おもしろい」がどこにあるのかを探ろうとしている	保育者は、子どもと関わる中で子ども一人一人の「おもしろい」は違うということを理解した。そして、その一人一人の「おもしろい」を捉えているため、保育者は、遊びの仲間の一員となって一緒に遊ぶ・子どもと同じような目線に立って同じものを見る・同じものに触れる・少し離れて見守る(観察する)・子どもの声(つぶやきや会話)に耳を傾けるなど、関わり方を考えながら探ろうとしていた。ただ、そこに答えはなく、様々な職員がいる中で捉え方も様々であった。	A	A	○子どもと積極的に遊び、子どもの興味を捉えようとする関わりが見受けられていた。また、子どもの遊びが継続していたのは、保育者の環境調整があったからだと思われる。	○年度当初に、重点目標(今年度育てたい子どもの姿)を職員間で共有し、子どもの課題と共に、保育者が今年度特に意識していくことを焦点化し、共有しておく  ○子どもの捉え・保育者の関わり・必要な環境について、引き続き園内研修などで職員が語り合う場をつくり、学び合っていく  ○行事等を見直し、子どもの遊びとのつながりや経験させたいことに必要なことは何かという視点で精査し、来年度の年間計画を決めていく
		子ども達が「おもしろそう!」と興味をもったことに自分から関わるができるような環境を用意している	子どもの興味のあることや経験させたいことができるようなものは何か考え、子どもが「おもしろそう!」と自分から関わるができるような素材の種類・大きさ・置き場所・数などを考慮して環境を用意してきた。また、子どもが「おもしろそう!」と遊び始めたことが、「おもしろい!」につながるよう、毎週末、子どもの遊びの様子や次週の見聞について会議を行い、環境を見直してきた。このような物的環境については意識ができてきた。	A	A	○小学校でも内発的動機づけを大切にしたいと思っているが、時間に限りがあると教師が引っ張ってしまうことがある。園では考える時間の保障を意識し、見守っていることが感じられた。	
		子ども達が自分なりに考えたり、試したり、工夫したりできるように、遊びの時間を確保し、子どもの遊びが中断しないよう、声のかけ方や関わり方、そのタイミングなどを考えて関わっている	子ども達が考えたり、試したり、工夫したりするには、じっくり遊ぶ時間が必要なことを職員が理解し、子ども達のやりたいことが継続的にできるように十分な時間の確保をしたいと考え、実践しようとしてきた。しかし、実際には、すでに決まっている行事などがあったり、見通した計画を立てることができずに子どもの遊びを時間で区切る等、一方的に中断させてしまうこともあった。また、保育者の声かけや関わり方のタイミングによって、子どもの試行錯誤の時間を逃してしまっていることを理解しているが、その適切なタイミングについては、まだまだ学び合う必要がある。	B	B	○遊びの種類がたくさんあることで、子どもの選択肢があり、一人一人が好きな遊びを見つけていると思う。  ○行事等を減らすのは難しいことだと思うが、見直し減らすことでゆったりと保育できるとよい。	

## II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員会から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	3歳までの経験を考慮し、就学までに育てたい姿を意識し、それぞれの学年で経験させたいことを捉えて指導計画を作成し、実践している	それぞれの学年で子どもの実態や経験させたいことを考慮し、月案・週案等の指導計画を立て、実践している。それらの作成前には会議を行い、他の学年の計画を職員間で共有している。また、公開保育では、幼児期に育てたい10の姿を視点に子どもの姿(遊び)がどんな力(学び)につながっているか振り返ることも取り入れている。未就園時期の経験や就学後の姿を含めた縦のつながりを見通した上で“今どんな経験が必要か”と考えるとまだまだ弱いので、発達をつながりを意識した計画を立てていきたい。	B	B	○幼児教育の大切さは、目に見えているところだけではなくと感じた。指導計画を作成し、共有する過程の中で子どもについて理解していることが伺える。	○それぞれの歳児のそれぞれの時期で大切にしたいことや経験させたいことを踏まえて指導計画を立て、立てた内容が発達に合っているか、縦のつながりを意識して検討する
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	一人一人の育ちや生活状況、家庭環境を考慮し、園児が安心して過ごせるような関わりや援助を行っている	子ども達にとって園が安心できる場になるためには、まずは保護者が安心することが大切と考え、保護者との対話を大切に、小さな変化に気づこうとしている。子ども達は、保護者の就労状況等によって、登園時間や生活の流れに違いがあり、家庭環境も一人一人違うため、一人一人が安心して園で過ごすことができるよう、把握した状況等は職員間で共有し、連携した関わりがもてるようにしている。どの職員も子どものことを分かっているということが保護者の安心にもつながっていると感じる。	A	A	○安心して生活するための「遊び」「人」「場所」の選択肢がたくさんあると感じている  ○職員全員が子どものことを知っていること、園の様子を伝えてくれることで、しっかり見てくれていると実感している。	○引き続き、保護者との対話を大切にしながら、把握した情報を口頭や記録を用いて職員間で共有することで、子どもにも保護者にも同じような対応をし、安心につなげていく
	(3)環境を通して行う教育及び保育	子どもの興味や関心を探りながら、子どもが自由に選び、取り出せるように環境を整えている	今年度は、空き部屋や廊下を活用し、ごっこ遊び、製作、楽器遊びができる場を整備した。また、子どもの興味のあることや経験させたいことができ、子どもがやりたい時に手に取って遊び出せるような環境を保育者が考えて準備してきた。環境を整えたことで子ども達は自分から遊び出すことができていた。	A	A	○環境が整えられたことで遊びの選択肢が広がったと思う。一方で、不足の状況を体験して子ども自身が必要なものが分かることも大切だと感じた。考える力となると思う。	○保育者が整えすぎたことで、不足している時はどうするか子ども達が考えていくができなかったのではないかとこの視点も大切に、準備した環境が子どもの実態に合っているか常に検討・改善していく
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	具体的な想定を考えた避難訓練、不審者訓練を年間を通して積み重ね、子ども・保育者ともに危険の少ない場所に避難をし、自分の命を守ろうとする行動がとれるようになっている	地震・火災・不審者等、様々な状況を想定した訓練を年間を通して行ってきた。今年度は、9月の引渡し訓練で実際に想定し、保護者に徒歩での迎えをお願いしたり、水害時を想定した訓練も新しく取り入れた。訓練を積み重ねていくことで、子ども、職員が自分で考えて、危険の少ない場所を探そうと意識が変化ってきていると感じる。訓練の様子を保護者にも継続して伝えていく。	A	A	○実際の災害を想定して実践的な訓練が行われていた。減災教育や徒歩での引き渡し訓練は、家庭でも考える機会となった。	○実際の災害時の保護者への引き渡しを想定し、小学校と日程調整をし、同日に引き渡し訓練を計画したい
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	食育活動を通して、食事が自分の身体をつくっていることを知らせ、日々の生活の中で健康に過ごすために必要なことを伝えている	給食室がない園ではあるが、その中でできる食育活動をしてきた。今年度、園運営の説明会後、保護者から協力したいと申し出があり、子どもに食育の話をしてもらう機会ができた。子ども達も身近な人の話により興味をもつことができ、それぞれの年齢の子どもなりに食べ物への興味をもったり、食べ物がつくっていることに関心をもったりできていたと思う。自分たちで栽培した野菜を子どもの目の前で調理して食べる体験も食への興味を広げることに繋がっていると思うので計画的に行いたい。	A	A	○保護者が講師となった食育活動や自分たちで栽培した野菜を調理して食べた経験は、子ども達の食への興味と健康意識に作用していたことが、子どもの話から感じられた。	○今後も、食べたものが自分の身体をつくっていること、季節や行事ならではの食材や料理を知らせたり、栽培やクッキングなどの体験の機会をつくり、食への興味を広げる
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	支援児のグループ活動を実施したり、研究保育2日目にクラス内での支援児の姿を見合ったりして、子どもの特性や支援方法、保育者の関わり方について職員が話し合いをし、理解を深めている	コーディネーターを中心に月1回、支援児担当の職員が集まって、支援の悩みを相談し合う場をつくっている。また、公開保育2日目には講師を招いて、支援児との関わりを見てもらい、支援の仕方や考え方について学び合う機会をつくっている。職員同士が話をする場、支援児の特性や対応について学ぶ場は増えたことで、支援児の姿の共有や支援の協力体制はできてきた。一人一人の特性も多様化して、支援方法も個に合わせていく必要があり、学びを深めていかなければと思う。	B	B	○園が食育を重要な教育と捉えていることがよく分かった。  ○支援児に関わる大人がその子の理解を深める話し合いの場があることがよい。	○支援児がじっくりゆったりと過ごしたり、成功体験ができるような活動を計画的に進めていく  ○様々な支援児の特性や対応を学ぶ機会をつくり、その後の変化についても語る場をつくる
5 組織運営	(1)組織体制の充実	自分の分掌に責任をもち、企画を立てたり、準備状況を把握したりし、他の職員に声をかけて協力を求め、園全体で教育・保育を進めようとしている	分掌の担当が、リーダーとなり、責任をもって進めている。計画や進捗状況などは、誰が見ても確認しやすいよう掲示をするなどし、分掌以外も把握できるようにしている。そうすることで、準備や実施に当たっては担当だけでなく抱え込むのではなく、園全体で協力しながら進めることができている。	A	A	○声を掛け合い助け合っている様子が伺え、園全体で協力していく風土は保護者にも伝わっている。	○さらに、計画・実施だけでなく、終わった後の片づけ等や次年度へつながる終わり方をもっと意識していく
6 研修	(1)研修体制の充実	研修テーマに沿った視点で公開保育を行い、話し合いの場で活発に意見を出し合い、次の日からの保育に学びが繋がっている	視点をもって公開保育を行ったり、参観したりしている。事後研では、写真を活用し、子どもの姿を語り合うことができている。研修主任が中心となり、日々の手立ての検証を行い、学びを次の日の保育に活かせるようまとめている。毎回、外部講師を招くことができているため、学びを深めることもできている。他園からの参観が多かった時には少人数のグループに分かれることで活発な意見交換ができた。	A	A	○写真を活用したり、外部講師を招いたりした研修によって、子どもに対しての様々な解釈や気づきがあり、職員の学びにつながっていたことが想像できる。	○様々な職員がいる中で、どの職員も意見が出しやすく、学び合うことができる研修方法を考えていく
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	日々の点検を確実に実行し子どもが安全に過ごせる場が整備され、必要に応じて修繕が進められている	毎日、毎週、毎月と遊具や園内の点検をしている。職員が気づいたことを声に出すことができ、すぐに修繕を行ってくれる職員がいるため、子どもが過ごす場の安全が保たれている。実際、子ども達の大きなケガも少ない。ただ、安全意識には個人差があるため、ヒヤリハットなど小さな事故等を報告し合い、職員の意識を高めていくことを続けていきたい。	A	A	○ケガの少なさから、日常の保育の中で、子ども自身がリスクを自分で見つける目を養っていると感じる	○今後も、ヒヤリハットなど職員が気づいたことをスピード感をもって報告し合えるようにし、職員一人一人の安全意識を高めていくことを続けていく
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	子どもの活動をおたよりや作品展などで見える化するとともに、保護者と日々のコミュニケーションや面談、懇談会などでも悩みや不安、楽しさなどを伝え合っている	毎日、コドモンで遊びの様子を写真を使って知らせている。また、日々の遊びや経験から表現された絵画を昇降ホールに飾ることで保護者が楽しみに見ている様子がある。他にも、面談、参加会、送迎時のやりとりなどで、子どもの姿やエピソード、育ちを丁寧に伝えている。写真や作品など目に見える形にすることで保護者に伝わりやすいと感じている。	A	A	○園の様子が分かることが、保護者にとって楽しみであり、親子の会話の話題にもなっている。また、作品の掲示は子どもを認める機会にもなっている。	○今後も、園生活での子どもの様子をコドモンで配信したり、子どもの製作や絵画を飾ったりし、子どもの遊びの様子を保護者に見える化して伝えていく
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携	近隣の小学校と子ども同士の交流や職員同士の情報交換の機会をもち、他の職員や保護者にその様子を伝え、共有している	授業の見学、小学校へ散歩ができた。今年度は、小学生がこども園に来て交流したり、小学校の先生に授業をしていただいたりする機会ができた。新しい交流の場ができたことは大きな一歩になった。一方で、それぞれのカリキュラムの位置づけやねらいなど、共有すべきことができていない現状がある。こども園と小学校の職員が話しながら交流の内容を考える時間が少しでも持てたら嬉しいと思う。	B	B	○園と小学校が互いの発達や活動を理解し、よりよい幼小接続にいくため、積極的に交流を図ろうとする動きが良いと思う。	○交流や連携の意味を理解し、ねらいをもった交流ができるよう計画を立てていきたい
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	子どもが地域の良さを感じることができるように、ESDを意識して地域に出かけたり、地域の人にも来てもらったりする行事や活動を行っている	近隣の公園へ散歩に出掛ける際に、ただ出かけるだけでなく、地域資源を見つけたら、子ども達が地域の良さを感じることができるよう、まずは保育者が意識することから始めている。また、ザリガニ釣り、たけのこ掘り、七夕の笹、焼いもなど地域の方の力を借りて経験を広げている。	A	A	○園内ではできない体験活動が園や家庭の遊びに反映していたと思う。子ども達が地域を知ること	○もっと、地域に出かけ、積極的に近隣とのつながりをもっていく